建学の精神

真理の源である聖書に基づいた本物を目指す。

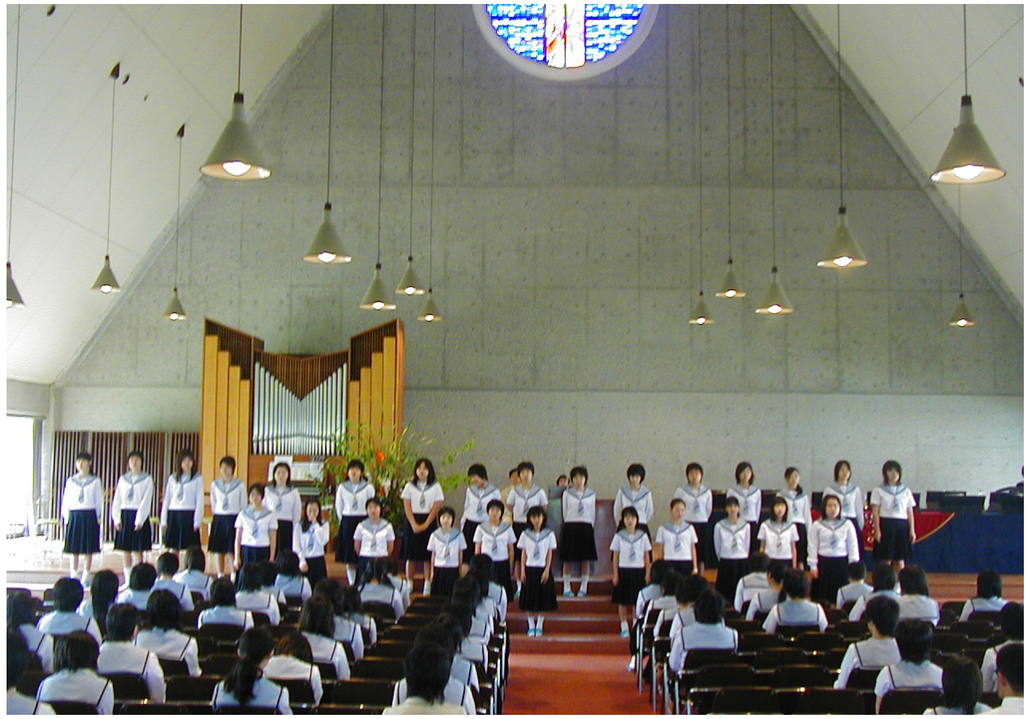
ー「心清く」「平和をつくり出す」純真な精神の上に「地の塩」「世の光」として、社会に輝く人間を育成するー

清和学園　校章・マーク
外郭は日本古来の鏡の形を表わし、中央の百合の花は清純と信頼を表わしています。百合の花は、マタイによる福音書の 6 章 28～29 節の聖句から選びました。

学校法人 清和学園

〒783-0007　高知県南国市明見98

TEL：088-863-1200　FAX：088-863-1289



創立

アニー・ダウドが、アメリカ南長老派の宣教師 グリナンからの依頼に応えて、英和女学校に赴任したのは、1887 年（明治 20）のことでした。しかし、50 人ほどの生徒は、自由民権運動の活動家 板垣退助の子女をはじめとする名家の令嬢で、宣教の希望に燃えて来日したダウドとしては、満足のいく活動はできませんでした。

1892 年（明治 25）ダウドは独力で〈キリスト教伝道女学館〉を設立。加えて、日本人の同志とともに街頭伝道を続けました。しかし、35 歳のときに乳ガンに罹り、神戸で静養します。神戸でもスラム街や紡績工場を訪ね、そこで見かけた薄幸な少女たちに胸を痛めました。高知に戻るやいなや、ダウドは鷹匠町に家を借り、二人の少女を引き取りました。不在中の 1898 年（明治 31）英和女学校は廃校になっていたので、そこで働く必要がなくなっていたのです。1901 年（明治 34）〈高知女学会〉創立。これが清和学園の始まりです。女学校とせずに女学会としたところに、ダウドの「家庭の延長の存在にしたい」という思いが込められています。

高知女学会はダウドの私費で賄われましたが、入学希望者が増えたため、ミッションの援助とアメリカの友人の寄付によって 1907 年（明治 40）新校舎が与えられました。入学が許可されるのは、逆境にある者に限られ、全寮制ながら学費も寮費も不要とされました。

1908 年（明治 43）ダウドは再びガンに罹りアメリカに帰国しますが、翌年、再来日。1912 年（大正 4）にはアメリカ南長老教会の援助も始まっています。

1923 年（大正 12）ミッションの献金を受けて待望の新校舎が完成しますが、わずか 4 年後、火事で全焼。このとき 66 歳だったダウドはショックで泣き伏しますが、すぐに立ち直り再建に奔走、なんと翌年には実現しています。

1932 年（昭和 7）ごろ、後継者としてクロフォード夫妻が着任しましたが、外国伝道局には事業継承の意志はなく、1934 年（昭和 9）最後の同窓会が行なわれ、1936 年（昭和 11）〈高知女学会〉は廃校になりました。

学校は高知教会の経営に移り、〈清和女学校〉として新たなスタートを切り、翌年全寮制は廃止されました。

創立者　Annie Dowd（1861～1960年）
教育者であり、事業家であり、
そして何より優れた伝道者でした。

創立の背景と歴史

アニー・ダウドが生まれたとき、弁護士の父は南北戦争に出征中でした。「ミシシッピー州ダウド様」という宛名で郵便物が配達されたほど、著名な名家だったといいます。音楽の才能に恵まれ、教会附属の女学校で音楽教師を務めたのち、アメリカ南長老教会ミッションに志願しました。

教育家としても事業家としても優れた才能を持つダウドですが、伝道への情熱は何ものにも勝りました。雨の日も風の日も街頭伝道に立った上、郡部への伝道も積極的に行ない、赤岡町、安芸市、土佐市、佐川町、土佐山村、東津野村などに及びました。ほとんど徒歩で出かけましたが、東津野村では道が険しく、農産物を運ぶための藁ふごに入り、背負われて通ったほどでした。

ダウドの最初の働きであるキリスト教伝道女学館に引き取られた二人のうちの一人は、菊池千鶴という 16 歳の少女で、のちに神戸神学校を卒業し、ダウドの元に帰り、片腕として活躍しています。清和女学校校長となった石井謙亮の夫人となりました。

恵まれない少女への教育というものの、教育の質の高さには定評があり、専門学校としての地位にあった高知女学会でしたが、卒業生は就職先で高等女学校卒業と同等に遇されています。

事業家としての一面は、学校経営に見ることができます。アメリカ南長老教会の援助が始まってからも資金が間に合わず、生徒の手芸品をアメリカで販売したり、ダウドの給与を差し出した他、アメリカの有志に日本の少女を援助してもらうパトロン制度のような仕組みをつくるなどしてやり繰りしたのです。

校舎が火事で全焼したときには、高知教会青年会、婦人会、西川合名会社、高知市議会議員有志といった、信徒だけでない多くの人から支援を受けています。もちろん、本国からの援助もあり、これはダウドの日頃の働きが、いかに多くの人の共感を呼んでいたかの現われです。1933 年（昭和 8）には、篤志家として当時の村上高知市長から表彰されますが、この時代に外国人が表彰されるのはまったく異例なことで、しかもそれは市議会満場一致で採択されたということです。

校舎再建を果たしたダウドは、次なる仕事に取りかかりました。生来病弱な者、病後休養を要する者のために、保養所をつくろうとしたのです。三里海浜に 1200 坪の敷地を得て、女学会の旧舎の一部を移築して 2 棟の保養所が建てられました。ダウドはこの事業で貯金のすべてをはたき、所持品を処分しました。まさに、天に宝を積む行ないでした。

1931 年（昭和 6）70 歳になったダウドは外国伝道局から、再三、帰国を促されましたが、1 年延ばしにしていました。高知女学会の廃校が決まり、ダウドは 1937 年（昭和 12）帰国して故郷のミシシッピー州に戻り、ジャクスン市の婦人養老院で入居者の魂を看取る仕事に就きました。生涯日本に留まり、日本に骨を埋める覚悟だったダウドが帰国することになったわけですが、のちに目と耳が不自由になったとき、「日本に留まっていたら迷惑をかけることになっていた。神様はそれをご存知で、帰国させ、良い住まいと働く場所をお与えになった」と言いました。